

徽宗 1082年（元豐5）～1135年（紹興5）

北宋の第8代皇帝（在位1100年～112年）姓は趙、諱は佶。政治は臣下に任せて、書画骨董などに凝り、国費を浪費し、「風流天子」と呼ばれた。「文化の皇帝」。

その政治への無関心は奸臣をはびこらせ北宋を亡ぼすことになった。皇帝失格であったが、国力のすべてを費やして文化事業を振興し、過去の文化の総括と、現代にまでつながる中国文化の土台をも築くことになった。

皇帝失格が、イコール、人間失格とはかぎらない。

書画骨董の尊重が、即、人間性の尊重とはかぎらない。

政治とは何か？庶民とは？士大夫とは？芸術とは何か？

その人間になりきらない限り眞実は解らないのではないか？

明代に作られた小説『水滸伝』（16世紀半ば）には北宋末の様子が描かれて面白い。

「**徽宗の奢侈**（贊沢）・・・民衆の生活をふみにじつた行いであつたらしい。
「**花石綱**」

※「綱」とは船団のこと。

庭園を造るために各地から花や名木や奇石を船で運ばせた。

蔡京が使つた商人の朱勔らは「天子の御用」と言つて江南一帯を荒しまわった。

強制労働させられた民衆の恨みを買ひ、

民衆蜂起の発生の一因となつた。（方臘の乱）1120年など）。

「艮嶽」の造営と太湖石。

艮嶽は全国から奇花珍鳥を集めた皇帝専用の植物動物庭園である。

庭園に使われた太湖石は白楽天によつて発見された。

それは、蘇州の太湖または洞庭湖で産し、蘇州文化の象徴である。

太湖石の流行は8世紀後半ころからはじまり、

中国の造園や文人の書斎の飾りに不可欠なものとなつた。

中国の石の文化の背景には豊かな思想がある。（道教の影響）

太湖石は山の象徴であり、大きな自然の一部として考えられた。

孔は洞窟と同様、別世界（桃源郷など）に通じる入口であり、

道士が仙人になるための修行の場所と考えられた。（「壺中天」の故事）

※「壺中天」とは俗世間とはかけ離れた別世界のこと。

（『後漢書』「方術列伝第七十二下」 費長房より）

奇石は小宇宙であり、突起は峰や山と見立てられた。

文人は風雪によつても変わらぬ石を真の友情のようなものと考え、生涯の友とするにたる友人と呼んで机上に飾つた。

それは、現実からの逃避のための隠遁術の一つとも言われる。

雪舟は石と岩を好み、中国の石の文化（太湖石）の影響を強く受けている。

「宮殿や道觀」の建造

「**美術工芸品の蒐集**」 芸術活動の資金作りのため民衆に重税を課した。

全國に使者を派遣して書画骨董を集めめた。

『宣和書譜』『宣和画譜』『宣和博古図』『宣和印譜』など收藏目録がある。

『宣和印譜』は印の収藏目録。これらはのちの書画研究の出発点となり、金石学の基礎を築いた。



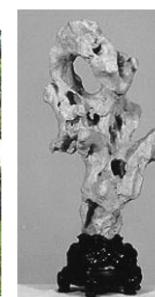
宣和書譜



雪舟「四季山水卷」に描かれた太湖石



太湖石



徽宗肖像

美術学校の創設と院体画の完成

(中国絵画史上ほかに類を見ない、国を挙げての絵画奨励の時代)

徽宗は翰林院に書院、書院の制度を整備し書画院を開設し、身分の低かつた画家の待遇を改善した。
徽宗は翰林图画院（書院と略称）の技術偏重の職人の絵画に不満で、それを芸術の水準にまで高めるため、書院から教育部門として「書画学」（または「画学」ともいう宮廷美術学校）を独立させ、自らその指導に当たった。

※ 1104年（崇寧3）徽宗は書画学を創設し、54歳の米芾を書画学博士とした。

書画学博士は蒐集された書画の鑑識にあたった。『宣和書譜』『宣和画譜』の編者は米芾、蔡京、蔡卞らと思われる。

※ 翰林院は唐代の玄宗が738年に設立した翰林学士院が起源で、そこに宮廷の絵画制作機関である图画院が設けられた。

※ 「翰」とは羽毛でつくった筆の意、「翰林」とは学者や文人の仲間の意、「翰林院」とは学芸に関する教育・研究機関の称。

「宋元の絵画」は中国絵画の最高峰。なかでも徽宗代の「宣和絵画」は中国絵画史のピークといわれる。



徽宗 「桃鳩図」 1107年（大觀元年）

上の「桃鳩図」は徽宗の唯一の真筆らしい。「どうきゅうず」また「ももはとず」と呼ぶ。
28.6×26.1cm 絹本着色 個人蔵（神奈川？）・国宝。
院体画の傑作で、宋元花鳥画の究極といわれる。
第二次院体花鳥画様式の典型。（崔白の影響）

院体画（院体という）

中国の宮廷画家（職業画家）の画風。

写実的で精密なのが特徴。

在野の文人画の様式に対するもので、南宋に確立した。

代表的画家は徽宗・夏珪・馬遠・梁楷など。

黄氏体と徐氏体（花鳥画の二大様式）

院体のはじまりは五代から北宋に活躍した黄筌、黄居寔

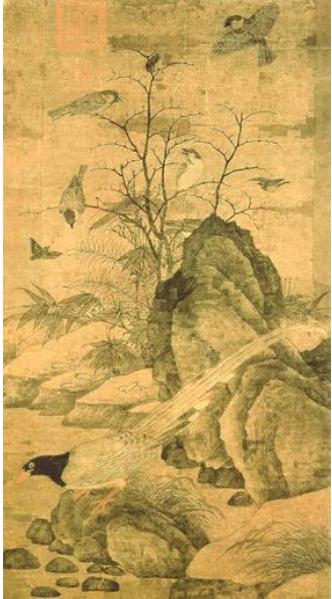
父子の花鳥画の様式といわれる。

写実を重んじたその様式を黄氏体といい、写意を重んじた南唐の徐熙の様式を徐氏体という。

黄氏体は書院での画の基準となり、徐氏体は士大夫、僧侶らに愛好され、文人画へとつながっていった。

徽宗はこの二大様式を統合した。（写実と写意の統合）

それは蘇軾の「画は無声の詩、詩は有声の画」という主張の影響を受けてなされ、その指導は余白を重んじ、詩の内容をいかに造形するかに主眼を置いたものであり、文学的な感受性や教養を画家に求めた。

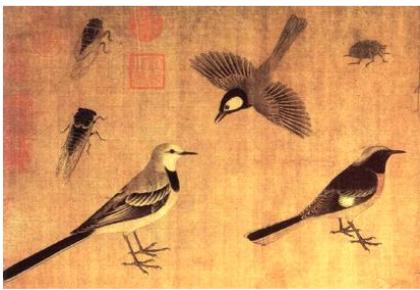


黄居寔 「山鷦棘雀図」 北宋



伝徐熙 「雪竹図」 五代十国代の南唐

徐熙は十世紀の南唐の画家。徐氏体の祖。
水墨に淡彩の簡素な手法で新しい花鳥画を大成した。



黄筌 「写生図」部分 五代～北宋

瘦金体 (瘦金書ともいう)

徽宗は、自ら瘦金体と名づけた細いがたいへん力強い独特な書を創造した。

それは楮遂良（596—713）の影響を受けた薛稷（649—713）や薛曜（684—704）の書を学んで考案されたようだ。

よくしゃべ
ふうそうにしじょう
欲借・風霜一詩帖
1110年
徽宗29歳の作。

卷之三

一一一〇年
徽宗29歳の作。

楷書。紙本。
七言律詩と五言律詩の
二首が書かれています。
33.2 × 63 cm

徽宗の瘦金体は褚遂良系書風の完成形なのかもしない。

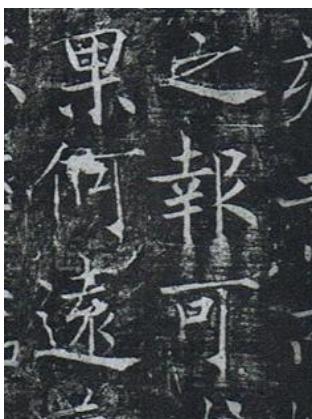


かじつの しじょう
夏口詩帖
小楷 紙本 七律一首
34 × 44,5 cm

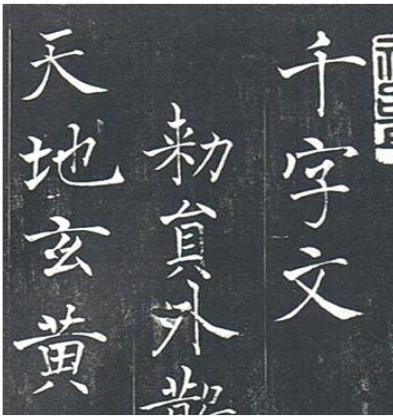
僕借嵯峨蕙仍崇故將工
巧狀層峯數尋舊色如煙
合一片盤根似蘚封院宇
接連常碧竹也亭掩映
却應松分眞裝出依巖寺
只欠清宵幾韻種

通洪湍而

薛曜
「夏日遊石淙詩」部分
700年



薛稷
「信行禪師碑」部分
706年

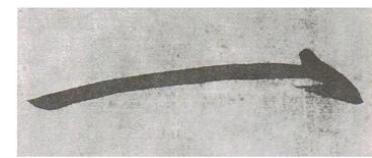


書道もろもろ塾 4 - 11 ('11, 8月)



晚風。翻逐徑，迷香舞蝶。留功。化獨筆，造難下。丹青霞照。似融。醉，殘露如。露露。爛一萼，燒庭中。依翠穠芳。

黃画、從画



不思議の
不思議



絵画



流動的で細く痩せた線。
行書のように点画がつながり、直線的で速い書きぶり
藏鋒、露鋒、筆の回転、上下動が強調される。

横画の起筆はきりこむ
ように鋭い。

收筆部は速筆。

送筆部独特の止め直し。



転折、リズミカルな点



長いハネ



左はらいは起筆に力をため、鋭く突き刺すようにはらっている。
右はらいは、三過折ではなくなめらかで、すべるような書きぶり。
転折部は楮法の伝統にのつとつている。



配置は整然としている。



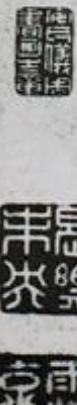
転折、リズミカルな点



長いハネ

徽宗楷書の特徴

書道もろもろ塾 4 - 11 ('11, 8月)

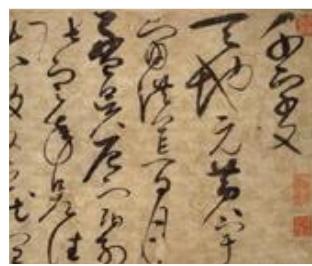


天地元黃宇富洪荒日
盈異辰宿列張寒東暑
秋收冬藏閏餘歲成律
千字文

神霄玉清萬壽宮碑

1119年（宣和元年）部分

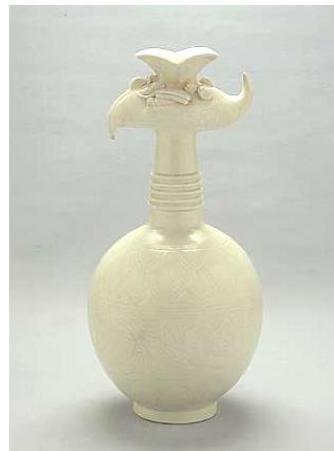
是荷而下民
累年于茲誠
群仙翼翼淳



草書千字文 伝徽宗 部分



汝窯 青瓷水仙盆 北宋 雨過天青の色



定窯 白磁牙白刻花菊花鳳首瓶 北宋

世界最高の芸術といわれるやきものがやかれたのは、北宋末の徽宗の時代である。

徽宗の書画や、作らせたやきものによつて、徽宗が夢みた理想の世界を窺うことができるかもしれない。そのやきものとは、「汝官窯」の青磁と「定窯」の白磁である。



崔白「双喜圖」 1061年 絹本着色 台北故宮博物院蔵

崔白は北宋後期の花鳥画家。

第二次院体花鳥画様式の典型。

崔白は微宗の絵の師である吳元瑜の師である。
二羽のオナガと兎が対角線上にあり、動きが表現されている。

李唐「山水圖」 双幅 京都・高桐院蔵 水墨系
李唐によって北宋画院の様式が南宋山水画に伝承され、画院を中心発展した。対角線構図法。

靖康の変（北宋の滅亡と南宋の始まり）

1126年（靖康元年）宋が金に敗れ華北を失った事件。（年表の下の歴史地図参照）

宋は遼（契丹）や西夏（タングート）の侵入に対抗できず、歳幣によって平和を保っていた。

※歳幣とは国家間の条約により毎年金品を贈つたりすること。

辺境の防衛軍の膨大な維持費に加え、歳幣や皇帝の奢侈などのため財政難になつた。

その打開策として出された新法をめぐっての官僚間の闘争の激化や（新法党・旧法

党的争い）相次ぐ農民の反乱（1120年の方臘の乱など）などが北宋滅亡の原因の一つとなつた。

※燕雲十六州は五代十国時代の後晋（936～946年）の初代皇帝の石敬瑭が後唐で反乱を起こし後晋を建国する時、遼の力を借りたことに対する見返りに割譲した地域のこと。

宋は1120年金（金は1115年遼から独立した女真族の国、後の満州族）と同盟を結び（「海上の盟」）遼を挟み撃ちにした。その結果、遼を華北から追い出すことができたが、宋が金との約束を守らなかつたり、同盟国であるにもかかわらず、陰謀を企んで金を亡ぼそうとしたりしたため、金はついに怒り、1126年宋に攻め込んできた。（1125年には金は西夏と同盟して遼を滅ぼした。）金軍が首都開封に迫るなか、

徽宗は「己を罪する詔」を発して退位し、長男の欽宗に譲位した。欽宗は講和を結んだが宋軍が講和を守らなかつたため金軍は総攻撃をかけ、1126年11月開封は陥落した。金は徽宗・欽宗ほか皇族や官僚など数千人を満州へ連行した。ここに1127年北宋は滅亡した。徽宗は1135年五国城（黒龍江省）で悲惨な最期を迎えた。享年54歳。開封が陥落したとき都にいなかつた徽宗の九男の構が江南に逃れて即位（高宗）し都を臨安（今の杭州）に定めた。これより後を南宋という。

その後、モンゴル帝国は1227年西夏を滅ぼし、1234年金を滅ぼし、1279年南宋を滅ぼした。

契丹文字（遼）

亥禁臍臚鷹鶻鷦鷯
鶩鶱鵠鶱鶱鶱鶱
鶩鶱鵠鶱鶱鶱鶱

西夏文字（西夏）

遼（916～1125）の耶律阿保機が920年に制定。漢字を参考にして作られた。

西夏（1038～1227）で十一世紀前半李元昊の時代に漢字を参考にして作られた。



南宋代の勢力図



女眞文字（金）

亥犬立羌元孤羌立
亥卓戛从夫干衆未月
日育志角牋足升丈丈

金（1115～1234）で

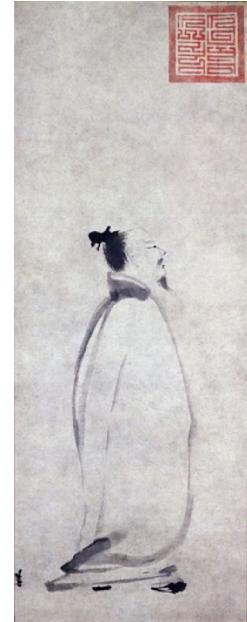
十二世紀に女眞族により契丹文字と漢字を参考にして作られた。



牧谿「六柿図」
大徳寺龍光院蔵



牧谿「観音・猿鶴図」
の「猿」 大徳寺蔵



梁楷
「李白吟行図」 十三世紀 東京国立博物館蔵 減筆体

水墨画（文人画）の完成



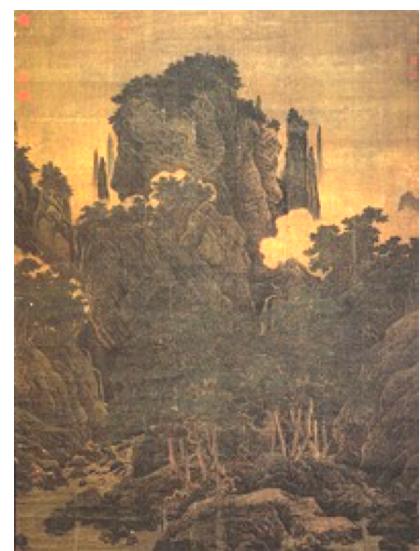
馬遠 「山徑春行図」 「辺角の景」台北故宮博物院蔵



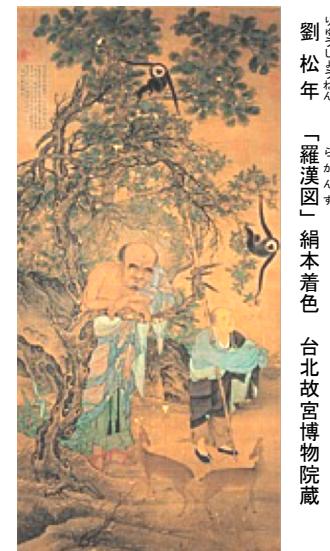
夏珪 「溪山清遠図」部分 台北故宮博物院蔵



夏珪 「觀瀑図」
台北故宮博物院蔵



李唐 「万壑松風図」
青綠山水系 台北故宮博物院蔵



劉松年
「羅漢図」 絹本着色 台北故宮博物院蔵



伝牧谿 「瀟湘八景煙寺晚鐘図」 岳麓記念館蔵



伝牧谿 「瀟湘八景漁村夕照図」 根津美術館蔵

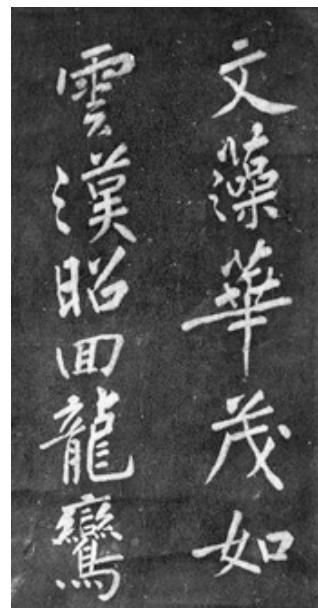
中国の藝術には現実再現と自己表出の対立する思潮がある。
(院体の写実画と精神性を求めた文人画の二大潮流)
宋元の水墨画は中国絵画の最高峰とされている。
牧谿は画僧であり、その作品は宋代絵画の総決算といわれる。

李唐・馬遠・夏珪・劉松年は南宋画院の四大家と呼ばれる。
夏珪は南宋中頃の人で、上の「溪山清遠図」は雪舟が「山水長卷」を描くとき、手本にしたといわれている。
右の「觀瀑図」は生地を空白のまま残して描いている。
空白の部分を虚形といい、描かれている部分を実形という。

南宋の書

南宋の書は前期は宋の三大家の影響が強かつたが、中期以降は晋唐への復古へと向かい、元の趙孟頫へとつながっていく。宋代は科挙の試験が楷書があまり重んじられなかつたことが優れた楷書がほとんどない理由かもしれない。北宋中ほどから巻き筆に代つて水筆が一般化し柔らかい字を書けるようになったことが、優れた行草書を産んだのかかもしれない。横幅に書かれ巻子にして保存するのが一般的だつたが、宋末に条幅形式が始まる。

高宗・仏頂光明塔碑（1133年）27歳の書 黄庭堅風。



高宗（1107年～1187年）（在位1127年～1162年）

南宋の初代皇帝。

父徽宗と同じく政治家としては無能だつたが、書を特に愛し、多くの集帖を刊行させた。

「蘭亭序」は士大夫の家にはどこでもあつたといわれている。
黄庭堅、米芾を学び次に二王を学んだ。

高宗・徽宗文集序（1154年）48歳の小楷 紙本 縦27.4cm全長137cm 文化庁蔵

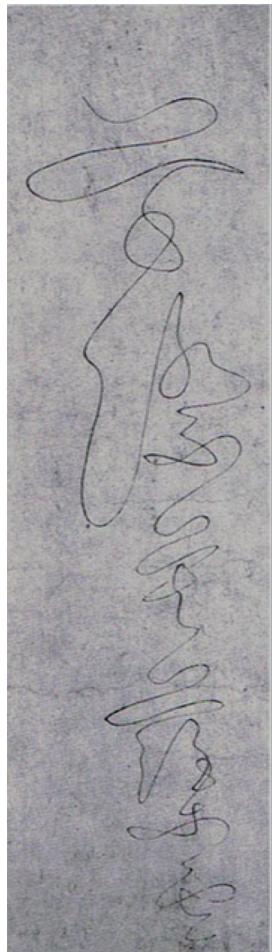
範圍天地

表章六經興三才比隆並二典同煥
詔百世至于萬世則期興子孫共祇于

天地 27.4cm 部分

吳說・王安石・蘇軾三詩卷（1145年）遊糸書（草書）紙本 草際芙蓉零

藤井有鄰館藏



吳說・伝王維伏生授經圖卷跋（1133年）楷書 紙本 濃墨が美しい。

大阪市立美術館蔵

宋の三大家の影響の強い南宋において、晋唐の伝統的な書を尊び、鍾繇風の、宋朝第一と称えられた小楷をよくした。

31×211cm 部分

桐江吳哲錢塘吳說

縦24.8cm部分

詩人・学者の書

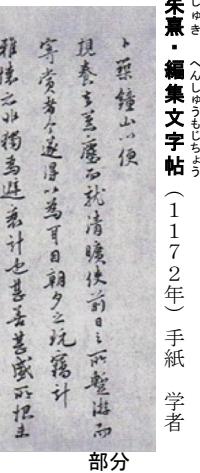
范成大・西塞漁社図巻跋（1185年）田園詩人

部分

日思故林次山時多薄休寧

蓋屢聞此後後十年自尚

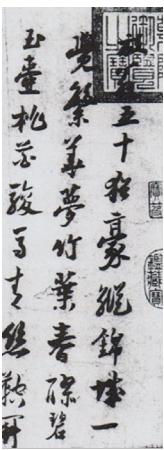
書郎歸故鄉遂卜葉石湖



部分

陸游・懷成都詩

詩人



部分

禅林墨蹟

書道の技法を超越した書である。書の精神的な表現力の典型であり、新しい書の美であった。

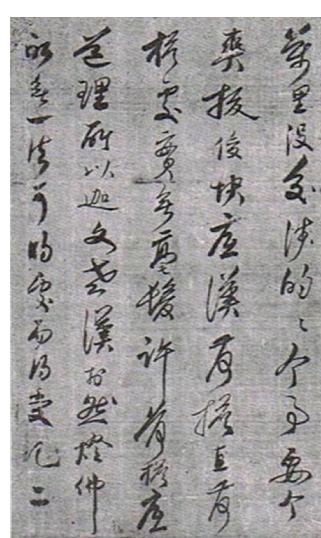
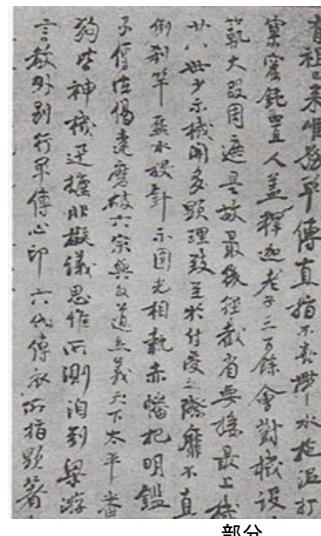
鎌倉時代初期から、栄西や道元や弁円などの日本の僧侶が宋に渡り、臨済宗などを日本に伝え、宋との交流が盛んになり、宋の文学芸術など中国文化の影響が大きくなつた。

宋に渡つた禅僧がもらつて帰つてきた師匠の書が大切にされ、室町時代の茶道の流行とともに「墨蹟」として珍重されるようになった。これは日本だけであつて、宋元の禅僧の書は中国ではほとんど伝えられていない。

円悟克勤 印可状

東京国立博物館蔵

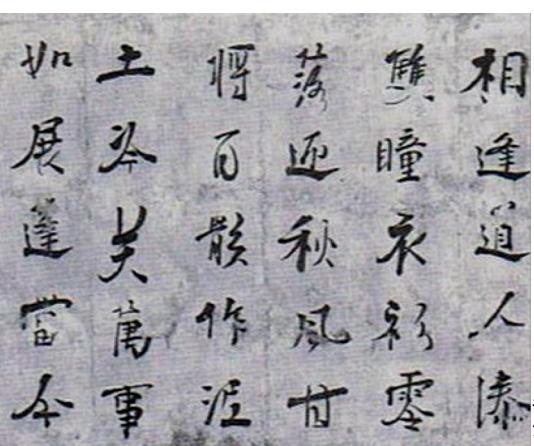
無準師範 印可状 東福寺蔵



虚堂智愚
偈頌

部分

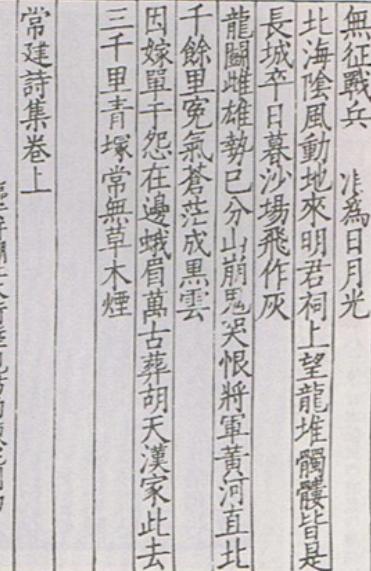
部分



宋版

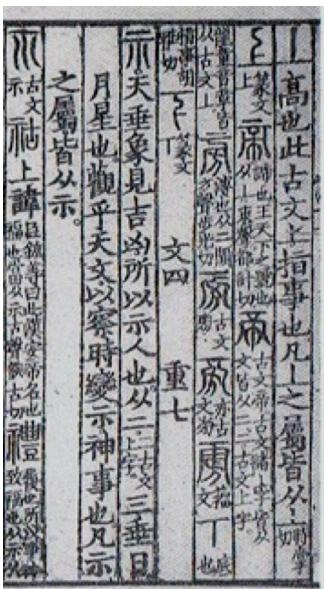
宋版とは宋代に印刷された書籍（版本）のこと。宋刊本、宋本ともいう。多くが禅僧によつて将来された。唐代の頃から印刷術による版本が行なわれたが、宋代には木版宋朝体活字が作られるなどしてさらに発展した。

字体は北宋版では歐陽詢や顏真卿や柳公權風のものがある。南宋では少し変化し、元代には趙子昂風が流行した。



宋朝体の例（南宋・十三世紀）

宋版 「説文解字」部分



活字の発達が手書きの楷書体の衰退の大きな原因と思われる。



虚堂智愚 頌字「凌霄」 大徳寺

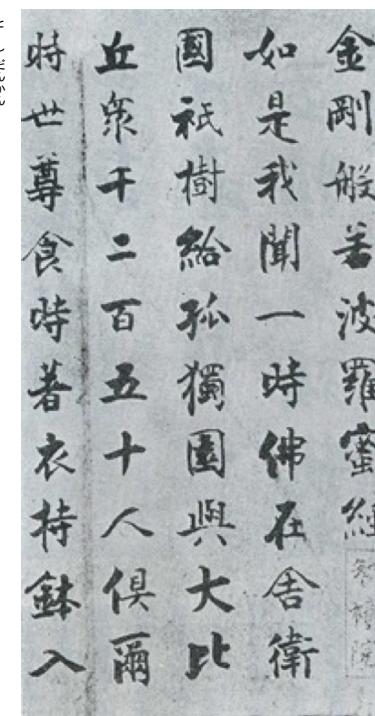
張即之 (1186~1266年)

張即之は僧侶ではないが、禪宗に造詣が深かった。

南宋に渡った日本の僧たちが張即之の作品を持ち帰った。

金剛般若波羅蜜經

(1253年) 智積院藏



杜詩斷簡
(1250年)

已喜

部分

李伯嘉墓誌

藤井有鄰館藏

皇威清海岱常

余昔隸業上庠與曾
稽李君伯嘉游獎十
丰暇日相過共博酒

部分

趙孟堅・自書詩
(1259年) 行書

自作の詩を書いたもの。

昇玉簪華唐端
石枕硯自好陽耳
觀者未知謂自如
也三十年臨池所得

部分

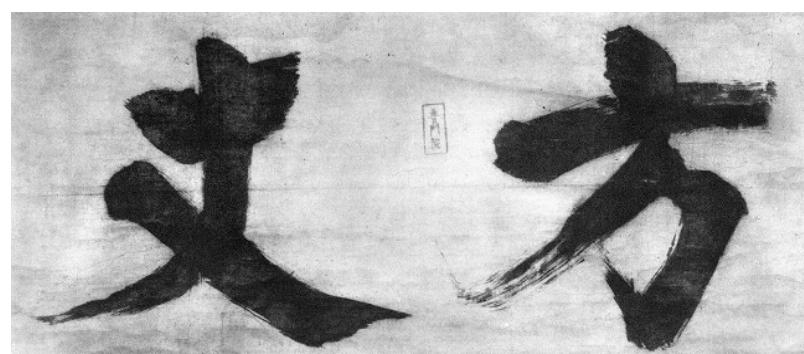
文天祥・木雞集序
(1273年)

三百五篇後三言而寫
而子後生止於此極至平易
之極不苟苟於言之無害

部分

(宿題)

宋の三大家の代表作（行書）をあげ、それぞれの特徴を述べよ。また三大家に共通した思潮は何か述べよ。



伝張即之 東福寺の額字の原本 「方丈」